

エソタ



笑福亭 たま

平成から令和になって何が変わるのでしょうか。われわれはイメーシとして「江戸時代から明治時代になった途端にチョンマゲをやめた」「明治から大正になった途端にデモクラシーになった」「縄文時代から弥生時代になった瞬間に米を食べだした」「みたいな先入観をちよつと持っています。もちろん違つとわかっていても、「ハワイの人は全員腰みのを着けて踊っている」ぐらいのアホな先入観がたまにチラツとよぎると一緒です。他府県からすれば「名古屋人はエビフリヤーと言いなから、毎日エビフライとみそを食べている」みたいな発想でしょうか。

■ 現代化と新作落語 ■

実際は元号が変わっても大きくは変わりません。気持ちの問題です。大みそから正月になるのと一緒で、何も変わらないのに「気持ちが変わる」のです。改元はそういうことです。

一方、文化や生活習慣は、歴史の時代区分や元号とは無関係に変わります。庶民の文化や生活習慣が大きく変わったのは江戸から明治への近代化の時ではなく、昭和三十、五十年代の現代化の時です。それが証拠に落語で江戸時代の侍、明治の人力車、昭和の丁稚の話はどれも古典(昔の話)に感じます。同じ昭和でも、携帯を使う子供と、丁稚の話は別の時代に感じます。

名古屋出身の三遊亭円丈師匠の著書「ろんだいえん」に

円丈師匠が起こした革命

三遊亭円丈師匠とのツーショット写真と円丈師匠の著書



よると、昭和三十年代ごろにわれわれがイメーシする江戸の生活習慣(火鉢、七輪、洗濯板、縁台将棋や近所づきあいなど)が減っていき、落語の世界と現実のギャップが大きくなり、「古典落語」という言葉が生まれたそうです。

ある意味、この時期が落語も転換期です。この頃から落語を作るのが急に難しくなります。それまでは生活習慣が一緒なので、落語は従来の作品をお手本にして作られました

が、生活習慣の現代化で今までとは全く別な視点で作品を作らないと落語に違和感が生まれます。そこで改めて現代センスで落語を作ったのが円丈師匠であり、その後、六代目桂文枝師匠など多くの新作派が生まれていきま

した。いわば円丈師匠が手塚治虫先生で、六代目文枝師匠が藤子・F・不二雄先生みたいなもんです。

円丈師匠の新作づくりは革命であり、落語史では「円丈以前・円丈以後」とも言われますが、ご本人は「今なお円丈中だ!」とのこと。そうそうだ。令和の時代に円丈師匠にはぜひ人間国宝になつていただきたいです。

(落語家「次回掲載は六月二十七日)